
相棒と24コラボ！

サイキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒と24コラボ！

【Nコード】

N2323K

【作者名】

サイキ

【あらすじ】

人気テレビドラマ「相棒」と海外ドラマの「24-TWENTY FOUR」を合体してみたいと思います。無理やりつなげた感がありますががんばってみたいと思います。

アメリカでは毎日といって過言でないほどテロ活動が行われ罪もない人たちの命が奪われてきた。元CTUロサンゼルス連邦捜査官ジャック・バウアーはある潜入捜査している仲間に日本がテロの脅威にさいなまれている情報をつかんだ。その情報は確かなもので赤

- ・ いかなりやの生き残りが計画しているのかとされていたのだが
- ・

第一話：出会い

「それは本当なのか？ ジャック」

そこにたっている二人のうちの黒人大統領がもう一人に問う。

「はい大統領。間違いありません。もうすでに日本のある公共施設で爆発事故起こり何百人の人たちがまきこまれています。」

もう一人の男金髪の白人で鋭い目をした男ジャック・バウアーが答える。

「それは本当に君が追っているテロリストなのかね？」

「間違いありません。日本の警察に連絡を取ってみたところ爆破予告が事前に出されその予告文にこちらが追っているテロリストと同じマークがついていました。」

「……青いカナリヤか？」

「はい。アメリカではその名前でテロを実行してきたやつらです。最も日本では赤いカナリヤと呼ばれていました。大統領私を日本に行かせてください。」

「だめだ！ 君が今離ればテロリストの思う壺だ！ 何かあったら取り返しのないことになるぞ！」

「ですが！ 今日日本に渡っているのは青いカナリヤのリーダーがいるかもしれないのです！」

今やつを取り逃がしたらそれこそテロリストの思う壺です！」

「……わかった。君の上司や日本の警察にも話をつけておこう
気をつけろよ。ジャック」

「ご決断ありがとうございます。」

その時ジャックの携帯が急に鳴り出した。あわてて出るジャック

「どうした？……んわかった」

「どうした？」

「新たな情報です。青いカナリヤが今度は警視庁内部のいたるところに細菌が入っている爆弾を設置したことです。警察上層部に
直接予告文を送りつけてきたみたいです」

「それで？」

「予告文によるとテロを防ぎたかったら刑務所にいる日本の赤いカナリヤリーダー的存在の渡部真一を解放せよとのこと。制限時間は46時間その間に無理やり避難させたりしたら爆発するとのこと。爆弾を見つけないと大変なことになります。」

「わかった今すぐ飛べ」

「了解。大統領！」

携帯を取り出しある人にかけるジャック

「ああ……クロエか？ちよつと頼まれてくれないか？実は今度日本で……」

『日本”特命係”』

「暇ですねー」

という図体がでかい男。いかにもスポーツマンみたいだ。

「暇ですね。」

メガネをかけてていかにも英国紳士で感じな男が答える。

と、そこにのんきそうな男が入ってくる。

「よ。暇か？」

「暇ですよ課長。なんか仕事ありませんか？」

「そういうなよ亀ちゃん。あ、そうだ昨日の新聞見た？ある野球場で爆発事故が起こったの。」

角田六郎といって特命係の横の係りの課長をやっている男が答える。

「ああ、見ましたよ。たくさんの人が怪我して・・・本当に死人が出なくて幸いでした。」

スポーツマンの男亀山薫（巡査部長）が答える。

「実はあれテロリストがやったって話だぜ？」

「それは本当ですか？」

英国紳士みたいな男、杉下右京（警部）が問う。

「ああ、その話で捜査一課は持ちきりだそうだ。混乱を避けるために予告文を發表しなかったらしい。で結果がああなった」

「その予告文にはなんと？」

右京がとうと

「大田スタジアムに爆弾を仕掛けた。爆弾は小規模のものだが殺傷能力は存分にある。爆破されたくなければ50億円用意しろ・・・
・・・確かにそういう内容だった」

「それで受け渡しは行われなかったのですか？」

亀山がとうと

「それがいっさい犯人からの連絡が途絶えたそうだ。そしてあの爆破事件がおきたらしい。」

「なんてひどい事を。そいつら許しませんね右京さん。」

「ええ。しかし気になる点があります。課長予告文にはカナリヤのマークが入っていたそうですね？」

「え？なんでそれを」

「鑑識課の米沢さんに聞きました。確か赤いカナリヤのマークではなく青いカナリヤのマークだそうですね。」

「青いカナリヤって……アメリカで活動しているあの？」

「ええ。青いカナリヤは赤いカナリヤと独立して作られた組織と聞かれています。」

「うっわすごいこと知っていますね。右京さんは」

その時めったにならない特命係の電話が鳴った。

右京が出ると

「はい、こちら特命係……はい？わかりました。今すぐ向かいます。」

亀山君いきますよ。」

「どうしたんですか？」

亀山が問うと

「小野田さんからです。早くこいとのことです。」

”官房長官室”

3人が座って話している。
そこに特命係の二人が入ってくる。

「およびですか？官房長」
と亀山が問うと

「ああ、いいところに来たね。まあ座って。」
小野田官房長官が答える。二人が座ると

「紹介するよ。こちら（男性のほうをさして）ジャック・バウアーさん。そしてこちらの女性が相棒のクロエ・オブライエンさん。二

人はねCTUの捜査官だそうだ。」

4人が握手しそれぞれ自己紹介が終わると

「それで今回ややこしいことが起こってね。」

「ややこしいといいますと?」

右京が問うと

「それは私から説明しましょう。」
とクロエが言った。

「実は日本のと警視庁内部に細菌爆弾が設置したとの予告文が送られてきたのです。

もちろんいたずらではありません。こちらでも確かな情報をつかんでいます。」

「なるほど、それではなぜ避難しないのですか?」
右京が問うと

「無理やり避難させたりすると強制的に爆破させるつもりらしい。予告文にも書いてある。」

とジャックが答える。

そして予告文を右京たちに見せすべて話した。

「なるほど大体わかりました。しかしなぜ俺たちに?」
亀山が問うと

「実は警察庁内に内通者がいる可能性が十分にある。だから官房長

に協力してもらって君たちに来てもらったってわけだ」

「一番信頼の置けるのは二人だからね」と小野田が言う。

「時間がない後22時間までに爆弾を止めないと大惨事になる。どうか協力してくれ。」

といってジャックが頭を下げた。

日本人は人に頼むときは頭を下げると聞いたからだ。

「わかりましたまかせてください。ね、右京さん」

「はい。」

「ありがとうございます。」
とクロエも頭を下げた。

「あ、後内通者や仲間たちに不審に思われないよう二人はインターポールから研修に来たことにしているから。何かと役に立つでしょう。」

「ご配慮ありがとうございます」

「とにかく急ぎましょう。時間がありません。細菌をばら撒くとしたら換気ダクトなどに仕掛けるでしょう。亀山君は各部署での聞き込みを。僕は監視カメラを調べてみます。」

「了解。」

「クロエは特命係にいつてスタンバイしておいてくれ。後方支援を

おねがいする。」

「わかりました。」

「何かわかったら俺の端末に送ってくれ。以上だ。」

つづく

第二話：捜査（前書き）

第一話をすこし書き直しました。

クロエって有能なんですよ。逆探知だって本の数秒で終わるし。

第二話：捜査

「ところでクロエさんは特命係の場所をご存知？」
と小野田が問うと

「ええ、大丈夫です。さっき爆弾を探すのに必要だと思ひまして警視庁の部署配置を確認してきました。頭に入っていますので大丈夫です。」

あ、それとジャックの端末にもパソコンで作った見取り図を送っていますので参考にしてください。」

「ああ、ありがとうクロエたすかる。」
とジャック。

「なかなか有能だね。クロエさんは。うちにほしいくらいだ」
と冗談か本気なのかわからない顔で言う小野田。

「まあそんなことより爆弾の場所を特定しましょう。」
とクロエが答える。

「Mr. オノダは爆弾処理班の手配をもちろん内通者に見つからないよう十分に注意して配置をお願いしたい。」

「了解しました。」

「さあ急ぎましょう。時間がありません。」
と右京

監視カメラがある警備室。

そこに右京とジャックが入ってくる。

監視カメラを見ている警備員に身分証を見せて

「警視庁特命係の杉下と申します。こちらは研修生のジャックさん。実はさっきネット上で警視庁内で何かが見つかるといういたずら書きが発見しましたので念のために調べさせてもらえませんか？」

「そういうことでしたらどうぞ。最近そういうの多いですよね。」

「ええ。そうなんですよね」

と右京

映像を見ていく三人。やはりそう簡単には見つからない。

「だめですね。怪しい人物は見つかりません。」
警備の人

「……………ん？」

「どうしました？何か見つかりましたかジャックさん。」

「この通気口はどこにつながる？」

とある通気口を指し示す

「ああ。ここなら通気ダクトにつながっているはずですが何か？」
警備の人が聞くと

「・・・・・・拡大してくれ」

言われたとおり拡大していくと・・・・

なんとその周りに明らかに細工した跡が残っていた。

「おやおや」

「やはりな。この映像を当時管理していたものは？」

「え？そういうえば高原純一って言う人このごろ休んでいるような・・」

「どうもありがとう。助かった。」

といって急に携帯をかけ始めた。小声でしゃべっているので何言っているか聞き取れない。

「その高原純一の住所電話番号を調べてくれクロエ。それとこの監視カメラにハッキングして細工されているはずだ。本当の映像を俺の端末に送ってくれ。」

「・・・・・・ん、やはりか。ありがとう助かった」

「何かわかったようですね。」

「ああ、あんたたちこの人物に心当たりはないか？」
といってクロエから受信した本当の映像に写っている男二人組みを
見せる。

首を横に振る右京

「あ、そういえばこの人！」
と警備員が思いついたように言う

「知り合いですか？」
右京がたずねると

「知り合いつてわけではないのですが高原と仲良く会話しているの
を何度かみています。」

「「どうもありがとう」」
といって警備室を出て行った。

”???.?”

「.....」

「どうやらCTUが動き始めているようですね。リーダー」

リーダーと思わしき人物とその部下たちが数人いる。

部下の一人が進み出てジャックとクロエの写真を差し出す。

「.....こいつらか。」

「さっきスパイから連絡がありました。どうやら俺たちの仲間のうち三人の顔がわれたようです。.....始末しますか」

うなづくリーダー

「了解」

”特命係”

我が物顔で椅子に座ってノートパソコンを恐ろしい速さでたたいて
いるクロエ・オブライエン。この様子だと犯人特定まであまり時間
はかかりそうもないようだ。

携帯を取り出し誰かに連絡するクロエ

「あ、Mr. オノダですか？爆弾の場所わかりました。爆破物処理
班がある通気口にいかせてください。それではよろしく願います。
」

亀山はネット上で不信な書き込みがあったという情報のもとで聞き込みを開始していた。
捜査一課の扉の前に着こうとするとあわてた様子の男たちが何人か飛び出していった。

「? どうしたんだ?」

「特命係のかめやまー君じゃないですかーなにやってんのかなー」
と変などなり声がしてきた。まあ、いつものことなんだが

「んだとこら! 俺がいちゃ悪いかよ!」

おっと今はこんなことしている場合じゃなかった。

「伊丹、不振人物見かけなかったか?」

「はあ?」

「どうかしたのか? 亀山」
と年長の刑事の三浦が尋ねる

「いなかったか？」

「いや別に見かけませんでしたけど？」
と一番若い刑事の芹沢が答える

「こら！何で答えるんだよ。」
と芹沢の頭をたたく伊丹

「いって！何でたたくんですか！」

どうしようかこいつらに協力してもらおうか？

つづく

第二話：捜査（後書き）

変な区切りかたしてしまいました

第三話：信頼（前書き）

感想お待ちしております。

第三話：信頼

そのころジャックと右京は高原純一なる人物の住所を特定しその家まで来ていた。

だがその家の前にたくさんの人たちが集まっている。パトカーも数台とまっているようだ。

顔を見合わせる二人。

「どうかしたんですか？」

と周辺の人に聞くと

「いやね、さっきバーーーンって大きな音がしたと思ったら家から出てきた高原さんが血を流して倒れたんだって！
いや驚いた驚いた。」

「くっそ！けされたか！」

ジャックが怒りをあらわにした表情で怒鳴った

「それで高原さんは無事なんですか？」

とそこにいた警察官に聞いた

「あなたは？」

身分証を見せて

「警視庁特命係の杉下です。」

「同じくバウアーだ。」

「杉下警部じゃないですか！」

と突然男に呼ばれた。

外見はオタクみたいな顔つきの男で格好からして鑑識課の人間らしい。

「ああ、米沢さん被害者の男性は無事ですか？」

右京が聞くと

「さすが警部ですね。事件を見つけるのがお早い。」

「それで！高原はぶじか？！」

と米沢につかみかかるジャック

「な、な、なんですか？この人」

「失礼。この人はインターポールから研修に来たバウアーさんです。被害者が知り合いかもしれないのでこんなにいらついています。」

「なるほど・・・高原さんはすぐに救急車で運ばれていったのがさつき死亡が確認されました。」

と、突然右京の携帯がなった。

「杉下です・・・はい？わかりました。」

「どうかしたか？」

とジャック

小さな声で

「小野田さんからです。細菌爆弾は見つかったそうですがどうやらジャックさん貴方の知識が必要なようです。」

「はあ？」

「ジャックさん、あなたこの爆弾を解体したことはありますか？」
「といって爆弾の写真を見せる右京

「・・・ああ、この爆弾ならずと前になるがやったことある。
・・・なるほどこれ明らかに俺が解体したものと違う構造になっているな。」

「え？これって爆弾ですか？」
と横から写真を覗きこんできた米沢

「ちょっと勝手に見るな！」
と怒鳴ったジャック

「特命係のく杉下警部ー」
伊丹が奥から出てきた
いつもの三人組と亀山もいる

「おやおや君もここに？」

「クロエさんからきいてここに来たらもう・・・手遅れになっていました。」
と亀山が言う

「それでMr. カメヤマ、高原の部屋から何か見つかったか？」

「・・・いいえパソコンまで調べましたが特に気になることは・・・」
「

「・・・そうか。じゃあ俺は爆弾を解体に警視庁に戻る。何かわかつたら連絡頼む」

「わかりました。気をつけてください。」

「ああ。」

といって急いで戻っていった。

「あ、それと伊丹たちに話してしまいました。」

「はい？」

「俺たちにも協力させてください。何かと役に立つでしょう。」

「・・・わかりました。高原の部屋に行きましょう。伊丹さんたちは周辺の住民に聞き込みを。」

携帯を取り出し

「ああ、クロエさんですか？今すぐこちらに向かってください。・・・え？もうきている？」

「ええ。ジャックから連絡が来ましてただちに向かいました。」
とクロエが突然現れた。

驚いた表情でクロエを見る6人

「さあ早く調べましょう。時間ありません。」

「・・・おどろいた。手回しが早いですね彼は」

伊丹がいうと

「彼は直感がするどいだけです。その直感で今まで何回も助けられてきましたから。まあ、それが原因でぶつかり合うこともしばしばですけどね。」

軽く笑いながらいうクロエ

「いいコンビっすね。お互い信頼しあっているのが伝わってきます」と芹沢が言おうと

「とにかくよろしくお願いします。」

右京が急いという

「了解」

高原純一の部屋

パソコンを起動させて（もちろん手袋付きの）手で何かを打ち込んでいくクロエ。

「まずメールの履歴から調べましょう。」
「といって数秒後に履歴が表示される。」

「できました。やはり監視カメラに写っていた二人組みとメールしていたようです。それと・・・青いカナリヤのリーダー的存在のやつにもメールをしていたようです。このメール全部が暗号文になっていますが」

「なるほど」
と右京

「質問なんです。監視カメラに写っていた二人組みは見つかったんですか？」

と亀山

「ええ、行方不明者リストに載っていました。それもアメリカの。」

「行方不明者ですか？」

「これは憶測ですが拉致された後洗脳されたんだと思います。」

「テロリストは洗脳の手段を講じて小さな子供まで使って兵器に利用することもあるそうだとか聞きました。」

と右京がいう。

「それ本当ですか？なんてやつらだ。」

「ええ、ジャックもそれでいろいろ苦労しているみたいです。洗脳をとくには洗脳した本人にしか解けないそうですから。」

「酷いですね。絶対許しませんよ。そいつら。」
と米沢

「ええ、なんとしてでも食い止めましょう。ね、右京さん。」

「はい。」

つづくー

第四話：銃撃戦

「ひとつよろしいですか？」

「といって人差し指を立てクロエに聞く右京

「はい？」

パソコンから目をはなさないでいるクロエ

メール文の暗号解読に取り掛かっているようだ

「例の二人組みは今はどうなっているのですか？」

「あの二人組みは私たちと別に来た捜査員が張り付いています。」

「え・・・どうして捕まえないんですか？情報を聞き出すのにはも
ってこいなのに・・・」

と亀山が問うと

「二人には監視がついていると思います。私たちが日本に今来てい
ることは一応内緒になっていますので今捕まえたらいろいろとやば
いのです。」

「なるほど、しばらく泳がせるんですな？」

と米沢がいう。ちなみに米沢にも説明をしている

「しかし高原さんと同じように殺される可能性もあるのではないの
ですか？」

「・・・！？」

突然クロエが立ち上がった。

驚くみんなに静かにするように合図をしコンセントの指し口などを調べ始めた。

顔を見合わせる亀山と米沢

それに対してクロエがやっている意味がわかったのか右京も調べ始めた。

数分後・・・

「やはり見つかりましたね。」
と右京がいう

「これってどういうことなんすか？」
亀山が動揺したように言う

クロエと右京の手に握ってあるのは手のひらサイズの監視カメラらしきものと盗聴器があった。

「部屋の隅々までこれらがありました。どうやら監視されていたみたいです。」

「・・・・・・」

「さすがCTU捜査官ですなー。ぱっと見てわからないのに盗聴器や監視カメラまで見つけて。」
と米沢がいう

「・・・・あいつのやりそうなことだから」
小さな声でクロエが言った

「え?。」

「それはどういう意味ですか？」
右京が問うと

と、その時

バン！！という大きな音が鳴り響き・・・・・・・・

「ぐうううう！」

「クロエさん！」

突然クロエが肩を押さえながら倒れた。

「皆さん伏せてください！」

と右京があわてていった

あわてて伏せるみんな

続けざまにたくさんの弾丸が降り注ぐ

「いったい何が！」

と亀山が言う

「・・・・・・・・どうやら私たちをけすつもりなようね。」

「クロエさん！大丈夫ですか！」

右京がいうと

「大丈夫。かすり傷だから」

といってジャキッと音を立てて銃を構えるクロエ

「Mr. スギシタ 援護を頼みます」

といってもうひとつの銃を取り出し右京に渡す。

「・・・・・・・・」

「どうやら向かいのマンションから狙撃をしているみたいですな。」
と米沢がいう

「ええ・・・Mr. スギシタ・・・人を撃ったことないのですか？」

「右京さんは銃が嫌いなんですよ。射撃訓練もしないし
といっても俺も人を撃ったことないんですが。」

と亀山が言う

「・・・日本てどこまでも平和ね。アメリカでは毎日といっていい
ほどテロが行われているのに。」

「お役に立てず申し訳ありません。」

本当にすまなそうな顔で頭を下げる亀山

その間にもたくさんの銃弾が降り注いでくる

早くなんとかしないと、関係ない人まで巻き込まれる可能性もある
し。

「・・・この役ってジャックの仕事何だけど。困ったわ。」

と、突然銃弾がやんだ

「?..?」

「どうしたんでしょうか？」

「弾切れでしょうか？」

「その可能性もありますね」

「といって銃を持ち、決心した顔で

「ここは僕に任せてください。その間皆さんは逃げてください。」

「え？」

「Mr. スギシタ貴方にできるのですか？」

黙って銃を持ち犯人がいる場所に銃口を向ける右京

そして弾を込め終わったであろう出てきた犯人に向かって突然発砲した。

どうやら犯人の肩に当たったらしくひるんだみたいだ

驚く3人

「右京さんってこんなこともできるんですか？」

という亀山

「・・・・・・・・・・」

「とにかく今は逃げましょう！」

という米沢

「いや待って！」

と突然叫んだクロエ

「「「!?!」」」」

「……今無線から入った情報です。Mr. イタミたちが犯人のいるマンションにいるようです。」

「それで？」

「……どうやら銃撃戦になっているようです。私たちもいきましよう」

「え？まさかあのマンションにですか？」
と亀山が言う

「いやなら今すぐおうちに帰りなさい。いい？これは遊びじゃないの。
ヘタすれば命を落とすかもしれないのよ？」

「……わかりましたいきます。」

右京がいう

「俺たちは？」

「貴方たちの分の銃は持っていないから車の陰にでも隠れていなさい。」

私が誘導しますから。」

「……わかりました。気をつけてください。」

何とか犯人がいるマンションにまでたどり着いた右京とクロエ
「犯人は何階ですか？」

「・・・無線を聞く限り6階ですね。」

「わかりました。急ぎましょう」

急いで階段を使い6階まで行く二人

6階

やはりすごいことになっていた。

この階の住民はいないみたいなので巻き添えはないみたいだが

「Mr. イタミ！」

「……あ、クロエさんと芹沢がいう

伊丹はそれどころじゃないので目線だけこっちに向けた

「現状報告お願いします。」

右京

「立てこもっているのは一人です。

さっきから何発も撃ち合っているのですが弾切れを起こさないんですよ。」

「……」

何かを考えているクロエ

やがて懷から筒のようなものを出す。

「……？それはなんですか？」

伊丹が聞くと

「……睡眠ガス弾です」

「「「ええええええええええ！？」」「」「」

「何でそんなもの持っているんですか？！」
微妙にひかれてしまった

「いやーそのーそのージャックが持っていけっというので・・・
私は（一応）とめたんですけど。もしものがあつたらいけない
というので」

その日みんなの心の中はひとつになったという。

（（（（（ジャックさんって・・・いったい）））））

その後、無事に犯人を捕まえられたという。

つづくー

第四話：銃撃戦（後書き）

いろいろすみませんでした！

第五話：説明

なんとか犯人を捕まえることができた右京たち車に乗り込み警視庁にいくとするが・・・

「・・・・・・・・あれ？クロエさんは？」

「いませんね。」

と右京が辺りを見回す。

すると数キロはなれたところに携帯電話を持ちながら誰かとしやべりながら高原の部屋から出てくるクロエの姿があった。小声でしゃべっているのだからにくい。

やがて、終わったのか携帯をしまいこっちにやってきた

「誰と話していたんすか？」

と亀山がとうと

「ジャックと例の二人組みに張り付いている捜査員に連絡していました。」

「それで爆弾はどうなりました？」
米沢が聞くと

「それが・・・・・・・・・・」

そのころジャックは

自分の記憶や爆破物処理班を頼りに順調に解体をしていた

爆弾から細菌を取り外そうとするとすぐに爆発する仕組みになっているようだ。なかなか厄介なものだ。

慎重に進めていったら赤と青の二本だけになった

しかし・・・

「どうやらこの二つのうちのどちらかを切断すると爆発し細菌がもれだす仕組みになっているようだな。」

「どちらを切るべきでしょうか・・・」

携帯を取り出すジャック

「クロエ！ なにかわかったか？」

『それが高原の部屋が狙撃されました。おそらく私たちがいることを知っていて狙撃したんだと思います』

「なに？ それで怪我は？」

『肩に一発撃ち込まれましたが大丈夫です。』

それと高原の家あちこちに監視カメラと盗聴器がたくさん出てきました。』

「……………あいつのやりそうなことだな。」

『……………ええ。パソコンからメールの暗号文が発見されました。』

「それで？」

『銃弾がパソコンに当たり壊れてしまい……………』

「復元はできないのか？」

『私のパソコンに転送中でしたので少しぐらいは何とかなるかもしれませんが後の時間内でやるのは難しいと思います。』

「……………爆弾の解体するには後二本だけ残っている。赤か青だ。」

『急いで復元と暗号解読をします。』

「いや待て。犯人はどうなっている。」

『ジャックからもらった睡眠ガス弾で捕まえることができましたけど?』

「そのまま犯人を連れてきてくれ。俺が尋問する。」

『わかりました。それと例の二人組みですが・・・狙撃される可能性はないのですか? 捕まえたほうが・・・』

「それはまだいい。まだ考えがある。」

「というわけです。」
とクロエがいった

「なるほど。」

「ちょっとまってください。なぜ二人組みを野放しにするんです？」
と亀山が問うと

「おそらくその二人組みって言うのは貴方たちのスパイですね？」

「・・・・・・・・・・」

「え？？」

「そして張り付いている捜査官というのが敵でしょう？」

「・・・・・・・・なぜそう思うんです？」

「まず第一に貴方たちほどの場数を踏んだ人がそんなミスみたいなことをしないと思いました。そしてさっきそのスパイから連絡があり無事を確認した貴方はジャックさんに報告をした後またスパイに何か指示をした。」

「・・・・・・・・・・」

「なるほど。」

と亀山が言った

「そして第二にさっきの銃撃戦です。」

あまりにも偶然すぎます。おそらくジャックさんは銃撃戦になることを知っていましたね？あなたが知っていたのかは憶測にすぎませんが。」

「……私は確かに知りませんでした。ですが疑問には思っていました。」

「なるほど、だからクロエさんに睡眠ガス弾を渡したんですね。」と米沢がいった

「……ええ、さっき私に全部話してくださいました。」

「それではクロエさん。」
と右京が改めた様子でいった

「はい？」

「僕たちに他に何か隠していることがありますか？」

「特にないと思います。ジャック自身が隠している可能性もありますが……」
私を知っていることは皆さんに話しました。」

「なるほど。」

「とにかく警視庁に戻りましょう。犯人を尋問しないといけませんから。」

尋問はジャック自身がやるそうです。」

「わかりました。急ぎましょう。」

う
う
く
ー

第六話：尋問（前編）（前書き）

遅くなりました！

注意…ちよつとだけグロいです。気をつけて！

第六話：尋問（前編）

とある場所

そこに複数の人間が座っている。上座にはリーダーらしい人物がいて目を閉じてじっと何かを考えている。

一人の男が進み出て

「リーダー。」

「・・・」

「高原純一の始末は無事に終わりました。」

「・・・それで？」

「塚山がやつらにつかまってしまい・・・」

「なに？」

リーダーの静かな殺気が充満していく。

凍りつく周り

「・・・っ！す、す、すみません！

今すぐにでも・・・！」

「くつくくく・・・じゃあ順調にいつているのだな？」

「え？」

「いや。それより・・・警視庁に細菌爆弾を仕掛けた2人はどうなっている？始末したのか？」

「・・・さっき連絡が入りました。それで・・・その・・・日本人のほうは始末できたのですが・・・」

おびえたようにリーダーを恐る恐る見る男

「逃げられたのか？」

「・・・はい」

黙って懷から銃を取り出し男のこめかみに当てる

「な、なにするんですか！？」

轟音が一発なり男の脳みそがぶちまけられた。

静まり返っている周りをよそに冷酷な表情で見下ろすリーダー目には狂気がうつっているようにも見える。

「片付けろ」

違う部下に命じ、また目を閉じ何かを考え始めた。

「リーダー。」

違う部下が恐る恐る話しかけてきた。

「・・・なんだ？」

「これからどうします？」

「・・・別にかまわない。ちゃんと準備してある。

計画を本来どおりに実行するまでだ。」

「塚山やもう一人は・・・」

じろつと睨み付けられ言葉が続けられなくなった男

「かまうな。俺に考えがある。」

ところ変わって警視庁に戻る途中の車内

まだ催眠ガス弾で眠っている犯人の肩の傷を治療するクロエ犯人の向こう側にさっきから黙って座っている右京をじっと見て

「後悔しているのですか？」

ときいた

「・・・ええ、何しろ初めて人を撃ったのですからね。」

「・・・私も最初に人を撃ったときは後悔しました。いくら仕事とはいえ人を撃ってしまい相手を瀕死の状態に陥れてしまったのですから。」

「・・・何日も悪夢が続きましたよ。」

「・・・」

「無理やり慣れろとはいえませんが。でもこれから先このような事態に陥る可能性も出てくるのです。わかってください」

「・・・わかっています。ありがとうございました。」

といって深く頭を下げた

数分後……

やっと警視庁に戻ってきた右京たち

「やっと帰ってこれたって感じっすね」

亀山が言う

「とにかく取調室に急ぎましょう。ジャックが待っているはずです。」

「わかりました」

取調室

ジャックが椅子に堂々として座っている。はつきりいって怖い……そこに右京たちが入っていき犯人を座らせる。

「クロエ傷は大丈夫か？」

犯人から目を離さずに聞くジャック

「ええ、大丈夫です。かすり傷ですから」

「……フツ。そうか」

そのまま睨みをきかせようとするジャックに

「おい！ あんた！」

と亀山がつつかかった。

「なんだ？」

表情を変えないままきいた

「あんた相棒にそれだけかよ！ あんた……すべて知ってて銃撃戦になること知っててあの家に向かわせたんだろ？」

もし相棒が死んでいたらどうするんだよ！」

「ふん。甘いな」

「なに？」

「甘いといっている。この仕事は常に危険と隣りあわせだ。クロエもちろんそのことは承知のはずだ。」

それを聞いて突っかかろうとした亀山を黙ってとめる右京

「亀山君、場をわきまえなさい」

「……すみません。つかつとなつて」

「Mr. カメヤマ私は大丈夫ですから。……ありがとう」といって米沢と出て行った。おそらくパソコンの復元と解読をするのであろう

「クックククク」

突然笑い出した犯人。

「なにがおかしい。」

冷静な口調で聞くジャック

「あんた仲間の命なんか屁でも思っていないだろ？
わかるうちのリーダーと同じだ」

「くだらん質問だな。」

「なに？」

「くだらんといっている。俺はクロエを信頼しているそれだけだ
お前のリーダーと同じにするな！」

バン！と机をたたくジャック

彼の目には怒りしかない。本当にそう思っているのだろうか？

つづくー

第六話..尋問(前編)(後書き)

・ ・ ・ ・ ・ そういう人なんですよジャックは
長くなりそうなので分けました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323k/>

相棒と24コラボ！

2010年11月14日10時16分発行